ツヴァイク全集

16

マゼラン

アメリゴ

関　楠生
河原忠彦
訳

みすず書房

マゼラン

アメリゴ

関 楠生
河原忠彦 訳

みすず書房

ツヴァイク全集 16
マゼラン
関 楠生
河原忠彦
共訳

1972年10月30日 第1刷発行
1974年1月20日 第3刷発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 東京(03)814-0131(代表) 振替 東京195132
本文印刷所 理想社印刷所
カバー・表紙印刷所 栗田印刷
口絵印刷所 京美印刷
製本所 鈴木製本所

© 1972 in Japan by Misuzu Shobo
書籍コード 0397-00162-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

マゼラン

緒言……7
原著者の注……12
第一章　航海が必要である……13
第二章　インドのマゼラン　一五〇五年三月――一五一二年六月……38
第三章　マゼラン自由の身となる　一五一二年六月――一五一七年十月……58
第四章　理念の実現　一五一七年十月二十日――一五一八年三月二十二日……80
第五章　千の抵抗に立ち向う一つの意志
一五一八年三月二十二日――一五一九年八月十日……99

第六章　出　帆　一五一九年九月二十日……117
第七章　無益な探索　一五一九年九月二十日――一五二〇年四月一日……134
第八章　暴　動　一五二〇年四月二日――一五二〇年四月七日……157
第九章　偉大な瞬間　一五二〇年四月七日――一五二〇年十一月二十八日……175
第十章　マゼラン、王国を発見す　一五二〇年十一月二十八日――一五二一年四月七日……202
第十一章　最後の勝利を目前に横死　一五二一年四月七日――一五二一年四月二十七日……220
第十二章　指揮官なき帰航　一五二一年四月二十七日――一五二二年九月六日……236

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

第十三章　死んだ者が損をする……262
マゼラン年譜……277

アメリゴ

序　章　アメリゴ……283
第一章　歴史的状況……286
第二章　不滅の三十二頁のために……299
第三章　一つの世界はその名を語る……312
第四章　大論争始まる……326
第五章　文書は干渉する……343

第六章　ヴェスプッチとは誰か……354
訳者あとがき……375

マゼラン

——人物とその偉業——

関楠生
河原忠彦 訳

Magellan

Der Mann und seine Tat

緒言

書物は種々様々な感情が動機になって書かれるものである。熱狂にゆすぶられて、あるいは感謝の気持に動かされて本を書くこともあるし、一方、憤慨、立腹といったさまざまの怒りが、精神の情熱に点火することもありうる。時には好奇心がその衝動となるし、みずから筆をとって、人間ないし事件を明らかにしたいという心理的欲求や、虚栄心、金銭欲、自己描写の悦楽など、かんばしからぬ動機が人を制作へと駆りたてることもまた実に多いのである。それゆえ、著者は本を書くたびに、どのような感情から、どのような個人的欲求からその対象を選んだかを、がんらい弁明すべきものなのである。本書の場合、私の執筆の動機はまったく明瞭である。それはいくらか異常な、しかしきわめて切迫した感情、すなわち羞恥感から生まれたのである。

つまり、この書物はこんなふうにして生まれた。私は昨年はじめて、長い間望んでいた南アメリカ旅行の機会を得た。ブラジルでは地上でもっとも美しい風景のいくつかが私を待ちうけ、アルゼンチンでは精神の友人たちとの比類のない会合が私を待っていることを知っていた。この予感がすでに、航海をすばらしいも

のとしてくれた。そして、考えうるすべての快適なものが旅行中ついてまわった。静かな海、広々とした快速船の上での完全なくつろぎ、すべての束縛や日々の煩労からの解放、私はこの航海の、天国のような日々を、測り知れぬほどに享受した。しかし七日目か、八日目のことだったが、私は不意に腹だたしい焦慮にとらえられた。いつも繰返し青い空、青い静かな海！　このにわかな興奮の渦中にあって、航海の時間はあまりにおそく過ぎてゆくように思えた。私は心中、一刻も早く目的地に着くことを願った。実際、時計の針が毎日倦まず進んでくれることが何よりの楽しみとなり、不意にこの無為の、生ぬるい、投げやりの享受が私の心を悩ましはじめた。同じ人間の同じ顔が私を退屈させ、甲板作業の単調さは、その規則的に繰返される静穏さのために、かえって神経をいらだたせた。ひたすら先へ先へ！　もっと速く、もっと速く！　突然私は、この美しい、心地よい、楽しい快速船が、十分速いとは思えなくなった。

私がいらだたしい状態を意識したのは、おそらく一瞬にすぎなかったろうが、それでもう私は自分がすっかり恥かしくなった。私は腹だたしくなって自分にこう言った。今、君はすべての船のうちでもっとも安全な船に乗って、この上ない美しい航海の旅に出ているのだ。あらゆるぜいたくな生活は君の思うがままになる。夕方、船室が涼しすぎれば、二本の指でコックをひねりさえすれば、空気が暖まる。赤道の真昼の日光が暑すぎると思えば、どうだ、ただ一歩あるけば冷房換気装置つきの部屋にはいれるし、さらに十歩あるけば、プールが君を待ちうけている。食事の時には、すべてのホテルの中で一番完璧なこのホテルで、あらゆる料理とあらゆる飲物を選べるのだ。まるで天使が運んできたとでもいうように、何から何まで魔法にかけられたようで、何でもありあまっている。ひとりでいることだってできるし、読書もできる。君の望むかぎり、甲板遊戯でも、音楽でも、社交でも、ぞんぶんに楽しむことができる。あらゆる便利なものが君の手中

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto

にある。一切の安全も保証されている。どこへ向っているかもわかっているし、いつ到着するか、その時間も正確に知れている。君の着くのを友情をこめて待ちうけている人のあることもわかっている。君と同じように、ロンドンでも、パリでも、ブエノスアイレスでも、ニューヨークでも、この船が地球上のどの位置にいるのかを刻々に確認している。小さな階段をすばやく二十歩も駈けあがれば、無線電信機から忠実な電波が発信されて、君の問い合わせやあいさつを地球のあらゆる場所に運んでくれる。そして一時間もたてば、地上の至るところからメッセージを受取るのだ。思い出してみるがいい、この短気者よ！　考えてみるがいい、この不平家よ！　これが昔はどうであったかを！　まあちょっとこの航海をかつての航海と、とりわけこの巨大な世界をはじめてわれわれのために発見した大胆な男たちの最初の航海と比較して見たまえ。そして彼らの手まえ恥かしく思うがいい！　当時彼らがとるに足らぬ小帆船に乗って道もわからず、果てしない大海原にまったく身を没し、たえず危険にさらされ、あらゆる悪天候、あらゆる欠乏の苦しみに身をささげて、未知の世界へと旅立って行ったようすを思い描こうと努力してみるがいい。夜の燈火もなく、塩からくて生ぬるい樽の水と、受けためた雨水のほかには飲料水もなかった。ひからびた乾パンや、塩漬けの油くさいベーコンのほかは、食物とてなかった。しかもこの極度に乏しい食料さえ、しばしば何日もひきつづき手にはいらぬことすらある。休息のためのベッドも部屋もない。暑さは悪魔のようで、寒さも容赦はしない。それにこのひとりでいる、救いようもなくひとりでこの無慈悲な海の曠野にいる、という意識がこれに加わるのだ。故郷のだれ一人として、彼らがどこにいるのかを、何ヵ月も何年も知らない。彼ら自身さえ、自分たちがどこへ向っているのか知らないのだ。苦悩が彼らとともに進み、死が海上であろうと、陸路であろうと、さまざまなかたちをとって彼らをとりかこむ。人間や自然の力による危険が彼らを待ちうけ、何ヵ月も

何年も、いや、この世にもおそろしい孤独が、彼らのあわれなみすぼらしい船の上で、彼らを永久に取巻いている。だれも彼らを助けることができないことを、彼らは自覚している。この未踏の大洋の上では、彼らは何カ月も引きつづき、どんな船にも出会うことがないのを知っている。だれも彼らを苦悩と危険から救い出すことはできないし、だれも彼らの死、彼らの破滅について報告することもできない。そういうことがすべて彼らにはわかっていたのだ。そこで私は今、この海の征服者たちの最初の航海を心の中で思い描きはじめないわけにはゆかなかった。するともう私は、自分の焦慮がひどく恥かしくなってしまった。この羞恥感は、いったん刺激されると、もう全旅行のあいだじゅう私から離れなかった。この無名の英雄たちを思う心は、一瞬も私を解放してはくれなかった。私は大自然に対して最初に戦いをいどんだあの人々のことをもっとくわしく知り、少年時代に私を感激させた、未知の大洋へ乗り出した最初のころの航海に関する叙述を読んでみたい思いに駆られた。私は船の図書室にはいって、手あたりしだい、二、三の書物を手にとった。いろいろの人物や航海のなかで、ただ一つだけがこの上なく私を感動させた。それは、私の気持の上から、世界探検史上、もっとも大規模な事業を果たしたと思われる男、すなわちフェルディナント・マゼランの偉業であった。彼は五隻のとるに足らぬ小帆船でセビーリャから出航し、全地球を一周した——おそらく人類史上もっともすばらしいオデュッセイア（オデッセウス漂流記）と言えるであろうが、堅い決意を抱いて出帆した二百六十五名の男たちのうち、わずか十八名のみが朽ちはてた船に乗って故郷へ帰りついたが、その船のマストの上には偉大な勝利の旗が高くかかげられていた。これらの書物には、彼についてあまり多くのことが伝えられてはいなかった。いずれにせよ、私には不十分だった。帰国してからも私はさらに読み、調べてみたが、この偉業についてはこれまでごくわずかしか、それもあまり信用できないことしか語られていないのに愕然と

した。すでに何度かやっていることだが、このときも私は、他人のために叙述しながらかたちを与えることによって、自分にもはっきりしないことを明らかにしてゆく方法がもっとも効果をあげるものと考えたのである。こうしてこの書物はできあがった――正直に言って私自身も意外に思ったくらいである。というのは、この別種のオデュッセウス航海を、手に入れられるあらゆる記録に拠ってできるかぎり事実に忠実に描写してゆくうちに、たえず何か架空のこと、壮大な願望のこもった夢、人類の聖なる童話の一つを物語っているような不思議な気持を抱いたからである。しかし本当らしくない印象を与える真実ほど偉大なものはないのだ。人類の偉大な英雄的功業は、この世の平凡な尺度をはるかに高く越えているために、何かとらえがたいものが常につきまとっているものである。しかし人類は、そのなしとげた信じがたいものにふれてのみ、自分自身に対する信仰を取戻すのが常である。

一九三七年

原著者の注

この最初の世界周航を企てた男の名前は、少なくとも四ないし五の異ったかたちで歴史に伝承されている。ポルトガルの諸記録では、この偉大な航海者は、時にはフェルナン・デ・マガリャイス（Fernão de Magalhais）、時にはフェルナン・デ・マジェリャエス（Fernão de Magelhaes）という名で現われているが、彼が後にスペインに移り、王に仕えるようになってからは、自ら文書にマガリャネス（Maghallanes）、あるいはマゲリャネス（Maghellanes）と署名した。その後、地図作成者たちはこのスペイン語形をラテン語化してマゲラーヌス（Magellanus）とした。この書物のために統一的な名称を選ぶ必要が生じたとき、私は国際的にすでに慣用となっているラテン語形のマゼラン（Magellan）を用いることに決定した。これはコロンブス（Columbus）をクリストフォロ・コロンボ（Christoforo Colombo）とか、クリストバル・コロン（Cristobal Colon）とか呼ばないのと同じ類推に基づくものである。彼の航海を実現させたハプスブルクの君主も同様に、出帆当時たんにスペイン王カルロス一世（Carlos I.）と呼ばれ、まだドイツ皇帝の王冠を戴いてはいなかったけれど、この本では常に、一層有名なカール五世（Karl V.）という称号で引用されている。

第一章　航海が必要である

「初めに香辛料ありき」。ローマ人が航海や戦争を機縁に、東方の刺すような、麻痺的な成分や、焼き尽くすような、陶酔的な成分に、はじめて味覚を発見して以来、西欧では「エスペセリア」(especeria) すなわちインドの香辛料を、台所でも地下室でも、なしですますわけにはゆかないし、すまそうともしなくなった。何といっても中世末に至るまで、北方の食物は想像もつかぬほど無味乾燥なものであったからである。今日ごくありふれたジャガイモ、トウモロコシ、トマトのような野菜が、ヨーロッパで永続的に栽培されるようになるまでは、この状態がまだまだつづいたのである。酸味用のレモンとか、甘味用の砂糖などはまだほとんど使われてはいないし、ましてコーヒーやお茶の微妙な興奮剤はまだ発見されていなかった。王侯貴族でさえ、愚かしい牛飲馬食にまぎれて、食事の生彩を欠いた単調さをみすごしていた。ところが、すばらしいことが起ったのだ。どんなにそまつな料理であろうと、たった一粒のインドの香辛料、僅かちりほどのコショウ、乾いたニクズクの皮、ナイフの先ほどのショウガ、あるいはニッケイがこれにまぜられると、もうごきげんになった口腔は、食欲をそそる異様な刺激を感じるのであった。酸味と甘味、苛烈な味と気の抜

けた無味といった極端な長調と短調の差異の間に、だしぬけに美味な、料理上の陪音と中間音が共鳴する。まだ野蛮な中世の味覚神経は、たちまちこの新しい刺激剤をいくら手に入れても満足するわけにはゆかなくなる。料理は、いやというほどコショウをふりかけ、口をひどく焼けただらせるときにはじめて、本物の料理と見なされるのであった。ビールにさえもショウガが投げ入れられ、ぶどう酒も、つきくだいた香辛料で熱くされて、ひと飲みするごとにまるで火薬のように咽喉を焼くほどであった。しかし西欧がこんなに莫大な量のインドの香辛料を必要としたのは、たんに台所のためばかりではなかった。婦人の虚栄心もますます多くのアラビアの芳香類を必要とし、つぎつぎと新しい芳香類、挑発的な麝香、酔わすような竜涎香、甘美なバラ油を求めたのであった。織物師や染物師はシナの絹類やインドの緞子を婦人たちのために加工し、金銀細工師はセイロンの白真珠、ナルジンガール産の青ダイヤをせり落さねばならなかった。さらに強力に東方の物産の消費を助長したのは、カトリック教会であった。というのは、ヨーロッパの幾千という教会で納室掛りが香炉にふりまく幾十億という薫香は、ただの一粒もヨーロッパの土地には産出せず、これら幾十億の一粒一粒が海路ないし陸路を経て、アラビアから果てしない道を運ばれてこなければならなかったからである。薬種商もまた、ひどく有名なインドの特効薬、たとえば阿片、樟脳、貴重なゴム樹脂などのいつも変らぬお得意先であった。彼らは香油も薬種も、もし磁器製のるつぼの上に青い文字で〈arabicum〉〔アラビアの〕とか〈indicum〉〔インドの〕とかいう魔法の言葉が書かれていないと、病人にはもうとうに、ききめがありそうには思われなくなっていることを、十分な経験から知っていた。すべて東洋のものは、遠隔の地のものであり、稀少価値と異国趣味があり、おそらくまた高価でもあるために、ヨーロッパにとっては暗示的な、催眠術的魅力をもっていたようである。中世には「アラビアの」、「ペルシャの」、「ヒンドスタンの」などという付加

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto